

斎藤茂吉と欧州留学 (1)

—ウィーン大学神経学研究所—

小泉 博明

日本大学大学院総合社会情報研究科

Mokichi Saito in Europe (1)

—Vienna University Psychiatry Institute—

KOIZUMI Hiroaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Mokichi Saito (1882-1953) studied at the Vienna University Psychiatry Institute in Austria. There he completed his doctoral dissertation entitled *Die Hirnkarte des Paralytikers* (Brain Records of Paralytic Dementia Patients) under the guidance of Prof. Marburg. In addition he studied under the guidance of Prof. Obersteiner, Prof. Marburg's predecessor, who guided Syuzo Kure (Mokichi's mentor) during his studies in Vienna. Though Mokichi had no clinical experience, he became an excellent physician. In this paper I focus on Mokichi as a physician during his time at Vienna University, and clarify various aspects of his everyday life.

1. はじめに

斎藤茂吉は、1921（大正10）年10月27日に欧州へ向けて留学した。午後5時15分東京駅を出発し、28日午前10時に横浜港から日本郵船熱田丸にて出帆した。茂吉は、これより前、東京府巣鴨病院を退職した時に、欧州留学を企図していた。しかし、第一次世界大戦が勃発し、日独関係が悪化したため、その計画を断念せざるをえなかった。茂吉の留学の目的は、ドイツの精神医学を研鑽し、学位論文を作成することが第一義であった。茂吉の同僚の多くは、すでに学位を取得し、かつ当時は海外留学も盛んであり、まさに、論文作成に邁進するための待望の留学であった。しかし、何としても論文を仕上げねばならない焦燥感と悲愴感を併せもっていた。

茂吉は、文部省在外研究員という名義であったが、自費の留学であった。留学前に久保田俊彦（島木赤彦）に宛てた大正9年11月11日付書簡では、「名義は文部省の留学生といふなれど自費なり。」「茂吉は医学上の事が到々出来ずに死んだといはれるのが男として、それから専門家として残念でならぬ」¹と言い、「業余のすさび」である作歌も断念する決意での

ぞもうとした。12月10日付、平福百穂宛の書簡では次のようにいう。

小生は明後年には官費留学も出来る順序になり居り候も、体の都合もあり、官にしばられ居る事もいやであり、留学は自費にして、いくら苦しんでも儉約してまゐりたき考に御座候。官費とせば未だ二年ほど勤めねばならず、職にあれば幾ら怠けて居ても相当の責任感もある事ゆえ、やはり三月頃やめて、十月ころまでうんと養生して十月頃出帆しようと考え申候。この考いかゞに御座候や、いつか御意見伺奉り候。²

このように官費での留学を待たずに、一日でも早く留学したいという覚悟があった。また、長崎医学専門学校教授であった1920（大正9）年は、インフルエンザ（スペイン風邪）と喀血の治療と療養に専念した年であり、ほとんど勤務できなかった状況への自責の念があった。

さらには、山田基新校長が、「軍人膚の気概のある人で、文学を軟弱なものとし、文学をやる者を国賊呼ばわりをして排斥する人であった。」³という。茂吉は「鬼瓦」と呼んで、嫌悪したのであった。病気

療養中の10月初め、山田校長に挨拶へ行った時に、次の歌をよんだ。

校長に会ひに行きたりおのづから低きこゑにて
病を語る

(「長崎」大正9年『つゆじも』)

また、次のような背景がある。茂吉の養父である斎藤紀一は、青山脳病院院長であったが、政界にも進出し、進取の精神というべき野望は飽くことがなかった。茂吉は、てる子と結婚し、婿養子となり、後継者として有資格者であったが、紀一には西洋、米国という子息がいた。紀一が欧州留学中に生まれたのが西洋で、後にアメリカ留学中に生まれたのが米国である。斎藤西洋とは、20歳の年齢差があったが、婿養子である茂吉にとって、西洋のことは常に心を煩わすことであった。それは、茂吉が後継者の地位に固執するのではなく、むしろ西洋に譲るべきであるという遠慮であった。そのためには、自らが医者として自立する必要があったのである。

なお、留学前の健康診断で、尿蛋白が出ていたが、茂吉には治療する猶予もなく無理して、出発したのであった。横浜港から、神戸、門司、上海、香港、シンガポール、マラッカ、ピナン、コロンボ、スエズを経て12月13日にマルセーユ到着まで、約1ヶ月半を費やした。マルセーユからは、パリへ、そして12月20日にベルリンへ到着した。

2. ウィーン大学神経学研究所

茂吉は、ウィーン大学への留学を当初から必ずしも決めていなかった。ウィーンの他に、養父紀一と親交のある老川茂信夫妻がいるハンブルク、そしてミュンヘンを考えていた。

茂吉は、翌21日にベルリンで前田茂三郎に会った。1897年生まれの前田は、山形県南村山郡堀田村飯田の出身で、茂吉とは遠縁にあたり、留学中は私事にわたり世話をした。茂吉は、後に前田のことを回想(「寸言」)して次のように言う。

三年の留学の間、一日として君との交渉の断えたことがない。僕が今、干蕨の味噌汁を吸って、痛切に君を思ふのは、単に共に蔵王山の麓に生まれたといふゆゑのみではあるまい。⁴

前田は、東京工業学校から海軍工廠に就職し、飛

行機の研究でフランスへ渡り、その後ベルリンに居住し、特務機関の仕事をしていた。

茂吉は、横浜正金銀行による日本貨円の特別信用状を持っていた。これは、ヨーロッパで引出した金額だけ銀行から通知があると、日本の自宅で支払うものである。ドイツには、横浜正金銀行の支店が、ハンブルクにしかなかったので、12月27日に、ハンブルクを訪ねた。ところが、翌日にベルリンへの帰途の車中で、信用状の盗難にあった。茂吉は銀行で二千元を英貨ポンドの信用状に作成してもらった。この辺の事情は「盗難記」に詳しい。また、盗難に遭遇した時に、前田茂三郎の世話になっている。茂吉は、「僕が、伯林、漢堡間の汽車のなかで泥棒にあつて、どぎまきしてゐたとき、君は伯林第一流のをどり場に僕を連れていって、シャンパンなどを飲ませたことを想起する。」⁵回想している。そして、ハンブルクへ行こうとした理由をいう。

なぜさうしたかといふに、東京を発つときの計画は、大体この大学で研究しようとしたからで、私のために呉教授からワイガント教授に宛てた懇篤な紹介状をも持参してゐた。ワイガントの処で研究した日本人がまだ一人も居ないので、自分はその最初の者として此処の業房に入らうとしたのであった。⁶

そして、最終的にウィーンで研究する経緯を次のようにいう。

それから、私はこれから、ハンブルグに行くか、維也納に行くか、未だ極まってゐないので、同じ専門の中村君に意見を徴したのであった。すると、『維也納には△といふ謂はば主がゐて、吹かれるぞ、吹かれるぞ』と云った。『君や僕のやうに専門学を一とほりやって来たものには、その吹く法螺も馬鹿らしくて溜まらないだろう。それが承知の上なら維也納でもかまはんよ』とも云った。これは暗にハンブルクを賛成するといふ意味にも取れたのであったから、私の心もハンブルクに傾いてゐたのであった。特に老川氏も居られるためになほさういふ心の動きがあったやうである。

然るに、この盗難事件があつてから、私はハンブルクを気味悪くおもふやうになった。さうし

て一夜ひとりで熟慮を重ね、維也納で勉強しよう
と決心し、一月十三日伯林を出発して維也納
に向ったのであった。⁷

中村君とは、中村隆治のことであり、茂吉より一
つ早い船で留学していた。なお、ミュンヘンの事情
は、唯一人の日本人が特別の許可を得て研究してい
るだけという情報であった。そこで、1922（大正 11）
年 1 月 13 日にベルリンを出発し、ウィーンへと向か
った。かくの如くにして留學生活が始まったが、ド
イツもオーストリアも第一世界大戦の敗戦直後であ
り、現地の世相は悪化し、経済的な窮乏も著しく、
急激なインフレに見舞われた。留學生にとって、敵
対国であった場所での厳しい状況下の生活であった。

1 月 20 日になり、茂吉は、呉秀三の紹介状を持っ
て、ウィーン大学神経学研究所を訪ね、所長のマー
ブルク教授（Otto Marburg）に会った。その時の感
動を、次のように歌う。

大きな御手無造作にわがまへにさし出されけ
りこの碩学は
けふよりは吾を導きたまはむとする碩学の髭見
つつ居り
おぼつかなき奥太利語をわが言ひて教授のそば
に十分間ばかり居る
はるばると来て教室の門に入る我の心はへりく
だるなり

（「維也納歌稿」其一、大正 11 年『遠遊』）

当時のこの神経学研究所には、岡田靖雄によれば
「久保喜代二、小関光尚、斎藤眞、内藤稲三郎、西
川義英の五名。（略）研究所の職員にはマルブルク教
授のほかに、講師ポラク、助手シピゲール、小使い
のヴィンメルなどがいた。」⁸という。この研究所に
は、すでに 5 名の日本人の研究生が居り、徒手空拳
で、一人ウィーンへ留学したのではなかった。茂吉
は、マルブルク教授から、麻痺性痴呆者の脳の病
理組織学的研究というテーマが与えられた。加藤淑
子によれば「麻痺性痴呆者 一黴毒の感染数年ない
し十数年後に、多くは四十歳前後の男子に発する脳
病で、野口英世が脳実質中に病原体を発見 一のホル
マリン漬けの脳七例であった。ブロードマンが
細分した区域毎に、計二百八十近い脳皮質の部分
を切りとり、それぞれ厚さ数ミクロンの切片を作成

して染色した標本の顕微鏡所見にもとづき、病機
の本態を論じ」⁹ようとするもので、細心の注意と、大
変な手間と根気が必要な研究であった。

茂吉は、巢鴨病院医員の時に、ワッセルマン反応
に関する学会発表を行ったが、論文はなかった。呉
秀三が欧州留学中に、ニスル（F.Nissl）から学んだ
神経細胞染色法を伝授されていた。茂吉は、脳片に
ニスル染色法を行い、郷里金瓶村に咲いていた黒み
がかった紫色の通草（アケビ）の花を思い浮かべた
のであった。茂吉にすれば、麻痺性痴呆の研究は、
すでに問題意識を持ち、懸案の研究ともいうべきも
のであった。

業房に一日こもりて天霧し降りくる雪ををりお
り覗く

（「維也納歌稿」其一、大正 11 年『遠遊』）

ウィーン大学を訪れて十日目の 1 月 30 日に、雪が
降った。終日、教室で研究テーマに没頭していた。
業房とは、森鷗外が訳した「ラバトリウム」のこと
である。

当時の精神医学の状況を回顧すると、小俣和一郎
は「1905 年に至ってドイツのシャウディンとホフマ
ンが梅毒病原菌スピロヘータ・パリーダを見出す。
翌 1906 年には、ヴァッセルマン（1866～1925）が梅
毒病原菌に対する血清診断法（いわゆるワッセルマ
ン反応）を開発し、梅毒とそれに伴う進行麻痺の臨
床的診断が一気に正確なものとなった。（略）1913
年、日本の野口英世（1876～1928）は、進行麻痺患
者脳からはじめてスピロヘータ・パリーダを分離す
ることに成功し、進行麻痺は脳の梅毒であることが
確定した。」¹⁰という。不治の病気であると言われた
進行麻痺という多くの精神病患者にとって、治療が可
能となり、その原因が梅毒病原菌であることが確定
した。なお、茂吉は、ワッセルマン反応の検査方法
について、巢鴨病院医員の時に、三宅鑛一副院長の
命により、駒込病院院長の仁木謙三の許へ行き、そ
の技術を既に習得した。

当時のドイツ精神医学では、グリーンギターの「精
神病は脳病である」というテーゼが踏襲され、他の
幅広い諸要因も考慮するべきであるが、このような
傾向があった。原因不明の精神病患者が死亡したなら
ば、その脳を取り出し解剖し、顕微鏡により、病理

組織学的に解明しようとした。前述した、野口英世が進行性麻痺患者の脳から梅毒の病原菌スピロヘータ・パリーダを検出したことにより、精神病はすべて目に見える原因が存在するという「確信」が生まれたのである。そのような時期に、その潮流の中で、茂吉の研究が行われたということを知っておく必要がある。

ところで、この研究所は恩師の呉秀三も学んだ場所であるが、創始者は先代所長のオーベルシュタイネル (Heinrich Obersteiner) である。オーベルシュタイネル (1847~1922) の経歴は、呉秀三の「オーベルシュタイネル先生を追悼す」に詳しいが、加藤淑子による略歴を記す。

創立者オーベルシュタイネルは 1847 年 11 月 13 日ウインで生れ、祖先は代々ウインの医者、1870 年ウイン医科大学卒業、数年後同大学において講師として中枢神経系統の解剖生理を講義し、その傍ら精神科医として実地開業した。1880 年助教授となり、二人の弟子を取立てるために私費を投じて 1882 年研究室を創設し、これを多年独力で経営した。多くの私費を建設にあてたので、はじめは小さな陋屋で人員も少かった研究室は次第に拡充した。1898 年教授となり、1905 年 1 月 31 日、それまでに約八万一千クローネ (三万二千四百円) の私費を投じた研究室の設備、標本、関係書物一切をウイン大学に寄贈した。¹¹

このように、ウィーン大学神経学研究所は、オーストリアにおける脳研究の中心的存在であり、神経学の教授、研究機関として、欧米において最初の、長い期間にわたり唯一であった。故に、呉秀三もウィーン留学中に、午前はクラフト・エービングの教室で精神病学を学び、午後はオーベルシュタイネルの研究室に通っていた。

オーベルシュタイネルの後継者であるマールブルクの略歴は、岡田靖雄によれば「1874 年モラヴィアに生まれて、1899 年ヴィーンの医科大学をでた。学生時代からオーベルシュタイネルの研究室で研究していて、卒業とともにその助手になった。1917 年に所長になったかれはユダヤ系であったために、1938 年に合衆国へうつらざるをえなくなった。ニューヨークのマウント・サイナイ病院にかれの研究室がもう

けられ、ついでコロンビア大学の神経学教授としてはたらいだ。」¹²である。

さて、茂吉は脳研究の中心的施設で、マールブルクから研究課題を与えられ、その成果を出すべき、刻苦精励するのであった。しかしながら、容易に結果が出るものではなく、懊悩し、時には同僚へ激昂することもあった。西川義英は「ウィーン時代の斎藤君」で次のようにいう。

私はウィーンで、オットウ・マールブルク先生の下に、斎藤君と約二年間机を並べて研究した。君は内科、私は外科であったが、共に脳神経の研究をした。

君はどこへ行っても可愛がられると言ったら語弊があるが、決して憎まれたことはない。どうも憎むことのできない人徳があつて、温厚な感じを受けたが、君の研究法はごく綿密で、時間をかけてやる所があつた。所がガタガタと仕事を片づけるたちの人もゐて、其一人が「斎藤君、そんなのろくさいやり方ちや出来上りはしないよ」と言ったことがある。其時は珍しく激昂して、「何をツ」と叫ぶと一所に拳をふり上げたので、丁度居合せた私が「喧嘩ならウィーン迄来てやる必要はないぢやないか。日本へかへつてやれ。」と言って漸く止めたことがある。さうして夕飯を三人で食って仲直りをした。君は精魂をかけて研究してゐたから、かういふ激昂もあつたわけだと思ふ。綿密であるから君の研究には誤りが無いのである。¹³

この時の事と思われる「五月十七日、教室にて」という歌がある。

この野郎小生利なことをいふとおもひたりしかば面罵をしたり

(「維也納歌稿」其一、大正 11 年『遠遊』)

歌人としての名声もある茂吉であるが、不惑をこえて、而立あたりの研究生と机を並べ、研究に励まざるをえなかった。巢鴨病院医員の時に、完成させるべき学位論文が遅れ、さらには第一次世界大戦により留学の好機を逃した事を悔いてもしかたがない。年齢的に厳しくとも、それまでにまとまった医学論文が無く、医者として、男として、歌の道を犠牲にしても、成果を挙げることが至上命令であった。故

に、その憤懣が激昂へと誘ったのであろう。異国にありながら、茂吉の競争相手は、年下の同胞という皮肉な状況であったのである。7月23日に「ひとり街上を行く」とある。

朝宵を青年のごとく起臥してひぐらし鳴かぬ夏
ふけむとす

（「維也納歌稿」其一、大正11年『遠遊』）

茂吉の心境たるや、この歌の如くであろう。

西川義英は、茂吉はドイツ語の会話が達者ではなく、「マールブルグ先生と会話しなければならん時は苦しんでゐた。先生が何か問ふ。すると直ぐに言葉が出ないので、例のやうに目をつぶって、あごをつき出す。単語でも何でも言ってしまうばいいのに、考へ込んで、それからポツリポツリ言ひ出す。先生もそれは吞込んで居られた。」¹⁴という。久保喜代二は、「茂吉さんはドイツ語にかけてはまったく口下手でした。たいていの人は必要上会話のレッスンをとるのですが、茂吉サンにはそんな様子は全然見られませんでした。ですからいつまでたっても同じで、恩師マールブルク先生とはとうとうよく話が通じないでしまったようです。」¹⁵という。

ただ、会話だけではなく、茂吉とマールブルクとの間の意志疎通は欠いていたようである。書簡にはマールブルクへの不満が綴られている。前田茂三郎宛では、「ベルリンで御わかれしてからもう四月になります。その割にはアルバイトが進まず、教授も猶太系に人ゆゑ口の上手な割に真実性に乏しいやうです。しかし今更やめるわけにも行きませんから、大に勉強してゐます。」¹⁶（大正11年5月3日）といい、中村憲吉宛では「今ゐるところの教授を小生は余り尊敬しないので、来年からどこかへ移るつもりだ。」¹⁷（大正11年6月30日）という。

3月13日に、マールブルクがはじめて茂吉の標本を見た。

わが作りし脳標本をいろいろ見たまひて曰く、”Resultat Positiv!”

（「維也納歌稿」其一、大正11年『遠遊』）

指導教授が顕微鏡で、茂吉が彫心鏤骨してつくった標本を見て、よい成果が出た感激を、この歌によんだのである。とは言え、1月にテーマを与えて、3月に標本を見た。茂吉にすれば、もう少し早く指導

を得たかったのであろう。

9月19日になると、次のように歌う。

「マールブルク教授の標本を一覧す」新秋の
夜に記しとどむる

（「維也納歌稿其二」大正11年『遠遊』）

茂吉のマールブルクへの評価について、柴生田稔は「対ユダヤ人意識のほかに、(略)茂吉自身の性格、神経質、感情的、気弱、身勝手、等々に、留学生的心境を加味したものを考へ合はすべきであろう。」¹⁸という。茂吉のユダヤ人への意識は、微妙な問題ではあるが、少なくとも当時の日本人留学生的対ユダヤ人意識の中に、埋没していた事は、否定できない所もあるであろう。また、柴生田のいう「神経質、感情的、気弱、身勝手」な性格は、この言葉からだけでは否定的な性格となるが、茂吉はそれらを克服し、精神科医として自立していったのである。

3. オーベルシュタイネル先生

呉秀三は、欧州留学中の、オーベルシュタイネル先生のことを次のように回想する。

余が先生の門に入りたるは、千八百九十七年の十月中旬なりき（略）朝に夕に懇に親みと暖みとを籠めて、顔を合せ、手を執り屢々諧謔をも交へて万事に指導を与へられ。他の人々にも左ありしならん、余には殊さら篤かりし様覚えたり。仕事につきては絶えず奨め励まし給ひ、細々と注意し給ひ又思惑の足はぬことは戒め給ひ批評し給ひ。親兄弟とてやかくあるべきとは思はる程の懇遇を受けぬ。¹⁹

オーベルシュタイネルは、ウィーン大学教授を70歳で勇退後も、神経学研究所にしばしば顔を出し、研究生の指導をしていた。茂吉は1月23日に、オーベルシュタイネル先生に会った。

はるばると憧憬れたりし学の聖まのあたり見て
われは動悸す

門弟のマールブルクをかへりみて諧謔ひとつ言
ひたまひたり

（「維也納歌稿其一」大正11年『遠遊』）

茂吉は、尊敬する人物の面前では、感激のあまり緊張し、謙譲どころか、極端に萎縮し、自らを矮小化する傾向が見られる。そして、相手に十分に自ら

の言葉を発することなく、その場を辞去することになる。オーベルシュタイネル教授の例だけでなく、無一塵庵での伊藤左千夫や観潮楼歌会での森鷗外との初めての対面の間も同様であった。

茂吉には「オーベルシュタイネル先生」という小品がある。維也納（ウィーン）の人々は、オウバアシュタイナアと発音していた。オーベルシュタイネルは、数回教室へ行き、茂吉の研究状況を見た。そして「背丈のひくい、七十を幾つか越えた老翁であるが、私どもに向ふ態度は無量の慈愛が籠ってゐるやうに見えた。私はいつもその態度に感謝し、心がひどく引きつけられた。先生は話が済んでわかる時などには先生の方から手を出された。」²⁰という。

また、次のように言う。

私は西暦一九二二年一月二十三日、はじめて神経学教室に於てオーベルシュタイネル先生に御目にかかった。さうして先生は、茂吉という私の名を幾たびも繰返された。長くて呼びにくい名であるからであった。その時、マルブルク先生も居合はせて、私がこれから為さうとする為事の方針に就いてオーベルシュタイネル先生に報告して呉れた。『前頭葉が一番犯されて、後頭葉が一番犯されてないといふことになって居りますが、もっと細かく、細胞の各層に於いても充分しらべて貰ふつもりでございます』かうマルブルク先生がいはれた。すると先生は、『さうか。それはなかなか骨が折れるぢやらう。しかし辛抱しなさい』と云はれた。²¹

また、次のように言う。

或る日の午前に、(いま手帳を繰って見ると三月十一日であった。)私は教室の一番奥の部屋に麻痺性癡呆の脳を持って行って、一人で脳のいろいろの部分を出してゐた。そこにのそのそと入って来た者がある。振返ってみるとそれはオーベルシュタイネル先生であった。私は驚いたが、手が汚れてゐるので直立して敬礼した。それから為事を続けながら、切出した数十個の脳片に、日本から持って行った墨を摩り毛筆を以て標を付けはじめた。これは私がこの為事を始めてから約二ヶ月の後に漸く工夫したのであって、瓶の数の徒に増すのを防ぐための窮策から

出でたのであった。オーベルシュタイネル先生がしばらくそれを見て居られたが、『日本人はなかなか器用だ』とひとり言のやうに云はれた。それから『なかなか骨の折れる為事ぢや。だが矢張り四週間為事は駄目だから、辛抱してやるがいい』と云はれた。²²

その時の感激を、次のように歌う。

おもひまうけず老先生そばに立ち簡潔にわれを励ましたまふ

(「維也納歌稿其一」大正 11 年『遠遊』)

また、1922 年 4 月 20 日には、友人の案内で、クロッテンバッハ街三番地の先生宅へ訪れた。その友人は、ウィーンの日本人留学生のなかで最古参であった。訪問した時の状況は次である。

『よく御いでになられた。— 先程から御待して居った。・・・お掛けなさい。お掛けなさい。』かう先生は云はれた。その言葉には無量の慈愛がこもってゐる。ただ先生の咽喉のあたりが呼吸する毎にぜいぜいして如何にも大儀さうであった。

私は、日本の呉先生からの贈物と、私の贈物とを先生の前に出した。すると先生は私等の目前で贈物の包をほどきはじめた。(略)

『どうぢや、呉はかはりはありませんか』

『はい、御丈夫でいらっしゃいます』

『さうか、呉はなかなか偉い男ぢや』(略)

私はその日も、教室に於ける私の為事の方針に就いて報告しようとする、『わしは、もう、よく知って居る』と云はれた。

『しかし為事はなかなか骨が折れるからな・・・さうぢや、何でも辛抱が肝腎ぢや。辛抱さへすれば、いつか為上がる』先生は、“Geduld”といふ語を二つも三つも使はれた。

『それは、何ぢや、四週間為事ではやはり駄目ぢやからな、よくよく辛抱しなさいよ』かうもいはれた。この、“Vierwochenarbeit”といふことを云はれた、先生のこの訓戒は私には二度目であったから、ひどく私の身に染みたのであった。私は自分の為事が捗らず、前途に寂寥を感じることが痛切であるときに、いつも先生のこの訓戒を思出して、そしてひとり寝の床にもぐり込

むのであった。先生のこの如き訓戒は、私等の先輩の誰彼もやはり聴かれたことと思ふけれども、私と同じ時代の誰かが聴いたといふわけではな、その時から一年の後、独逸の国を遍歴して多くの教授にも逢会したが、つひぞ如是の慈愛に満ちた言葉を聞くことが出来ずにしまった。²³

この時を、次のように歌う。

わが業を励ましたまひ堪忍の日々を積みとふ言のたふとさ

「四週間業績を羨むことなかれ」かくのごとも諭したまへる

(「維也納歌稿其一」大正 11 年『遠遊』)

このように、茂吉はオーベルシュタイネルの人柄を、「無量の慈愛」が籠もっていると繰り返し言う。茂吉のいう「為事」とは、医学上の、学位を取得するに必要な研究成果のことである。そして、先生の訓戒に込められた激励の言葉を胸に刻み、茂吉は研究に専念するのであった。さらに次のように会話は続く。

『ポオラツク Dr.E.Pollak に聞けば、君は詩人ぢやさうな。併しわしには日本語が出来ないので残念ぢや。日本の詩といふのはどういふのかな』ポオラツクといふのは教室の助手の名である。

『短い形式の抒情詩でございます』

『やはり押韻をしますかな』

『いいえ、三十一音律で、韻を踏まずに、五音七音で続けてまあります。(略)』

『さうか。詩は生の内の方から出すのぢやからなかなかむづかしい。維也納では詩人を尊敬しますぞ』(略)

『君は Lenau といふ詩人を御存じかな』

『はい、存じて居ります』

『あれは、わしの病院で亡くなったのぢや』

『左様でございますか。やはり神経病ででもあったのでございますか』

『進行性麻痺狂で亡くなったのぢや』

『さやうでございますか』

談話は一寸とぎれた。その時、私は彼の可憐な、悲哀に傾いた多くの抒情詩を作ったレナウが、

現在私の為してゐる医学上の為事の材料となり得る脳の持主として没したことを思うて、慄然として恐れたのであった。さうしてレナウの脳髓の細胞層の変化といふやうなことが、ある現実性を帯びて私の意識裏にあらはれても来るのであった。(略)

私等は先生の邸をまからうとしたとき、先生は『またおいでなさい。いつでもおいでなさい。』といって手を握られた。²⁴

このように茂吉は、オーベルシュタイネル先生宅を訪問し、詩についても論じ、一服の清涼剤とも言うべき、安らぎと充実した時間を過ごすことができた。後になるが、茂吉はレナウの墓に詣でた。日々の研究は、緊張の連続であった。

教室で緊張した為事をして居り、一日一日が暮れて行つた。そのあたりは私は女人不犯の生活を守つてゐた。また夜遊びなどもせずに夜もなるべく早く寝た。四十歳を越えて異境に渡り、三十歳そこそこの血気の若者と伍して為事をしようとするのには、その覚悟が大切だと私は思ったのであった。(略) いつも『おれはいま若い者の真似をしてはいかぬ』といふ一種の戒律が私の頭を支配してゐたのである。

『ちいとは賑かなとこへ出て来いよ』

『近ごろ少し変だぜ。・・・いまにノイって、へたばつてしまふぜ』かう或友が云つた。『ノイる』といふのは神経衰弱病になるといふ、和洋混淆の医者言葉なのであった。けれども私の心の奥には、最澄・空海などの過去の人さへ知らなかったであらう孤独に堪へる或物が潜んでゐた。

²⁵

茂吉は自らの課題を「為事」という言葉に凝縮し、異国の地で、孤独に堪え、あたかも修行僧の如く、ストイックな生活を送つたのであった。茂吉の覚悟と労苦が感ぜられる。同研究所員であつた久保喜代二は「ウィーン時代の茂吉さん」で、「茂吉さんは人の前でよくノートする癖がありました。話の途中であろうがなかろうがいっさいおかまいなしでした。(略) 茂吉さんの神経学研究所における生活は実に立派でした。朝から晩まで規則正しくこつこつと仕事をされました。隣に机をならべていた私は自然そ

の感化を受けたように思われます。(略) また、時折瞑想するかのように瞼をとじながら舌をぺろりとどかせる不思議な表情は、三十有餘年たった今日でもなつかしく思い浮かべることができます。」²⁶ という。まさに、茂吉の性格、しぐさが見て取れる。

同年の11月19日には訃報を聞いた。オーベルシュタイネルが病没したのであった。

ハインリヒ・オウベルシュタイネル先生死し給ひ堪へがてに寂し立ちても居ても
あたたかき御心をもてわがかしら撫でたまひた
るごとくおもひし

(「維也納歌稿 其二」大正11年『遠遊』)

11月22日、葬送が行われた。

老碩学の棺のまへに相ともに涙垂れてシューベルトうたふ悲しみ
ドエブリングの墓地に葬りのつひの日に雲ひくくおりて寒さいたしも

(「維也納歌稿 其二」大正11年『遠遊』)

呉秀三の「オーベルシュタイネル先生を追悼す」には、奥地利国「維也納神経学教室に滞在研究中なる、斎藤茂吉君より左のごとき詳細の書面を受取りぬ。」とある。その書面の一部は次である。

拝啓陳者十一月十九日午後四時、オウベルシュタイネル先生はクロッテンバッハ街三番地の自邸にて逝去被成候。七十七歳の高齢にて逝かれ申候。当日は午後より雪さかに降りいで申候。当日は日曜なりしゆゑ、小生等は少しも知らずに居り、翌日教室にまゐり小使から聞いて驚き候次第に御座候。葬式は二十二日の午後三時過ぎ自宅出棺(略)加特利教の教式にて営まれ申候。(略)葬式の当日小生ら日本人四人は日本人を代表して先生の霊前に花輪をさゝげ申候。

(略)棺は嘗て御目にかゝりしことのある先生の書斎にアンチされあり、悲しき花輪にうづもれてあり候。去る四月に先生に御目にかゝり故郷の呉先生や三宅先生のことなど物語られし部屋に御座候。(略)小生はオウベルシュタイネル先生には前後四回お目にかゝり申候。(略)五月ごろからもはや御いでにならず、こゝ一月は全く牀につかれ候由に御座候それを小生等は今まで知らずに居候次第に候。呉先生はじめ先生の

教をうけられし、故郷の方々の御驚き御悲しみ幾重にも御察し申上げ候。文章体を成さず混乱いたし候段何卒御推読奉願上候。頓首。²⁷

呉秀三は、オーベルシュタイネル先生を次のように追悼している。

嗚呼。先生逝き給ひぬ。世界に於ける神経精神科の将星は永き光芒を空に曳つつ地に墜ちぬ。

(略)先生の神去りましぬるは、学界の空は重なる雲に掩はれて、すきもる光さえなくにいともいとも暗がりたりとこそ覺ふれ。是独り吾等門下輩のみならず、世界同学者一統の悲歎なるべし。²⁸

オーベルシュタイネルは、「学問の興隆は万国的であらねばならぬことを高調し、(略)偏国土主義、偏執愛国主義(略)は学問の発達を阻礙するもの」といい、さらに「人種的憎悪は吾人を滅亡に傾けつるも吾人は更にかかる偏執なく世界と共に和睦し暮さん」²⁹という。茂吉は、温厚篤実な老大家オーベルシュタイネルへの敬愛が深く、オーベルシュタイネルから呉秀三、そして茂吉という師資相承の観がある。そして、茂吉も病者に寄り添う、慈愛の精神を継承したのである。

4. 麻痺性癡呆者の脳カルテ

茂吉は、1923(大正12)年3月8日、「麻痺性癡呆者の脳」に関する研究論文の原稿を印刷所に提出し、4月14日には、その論文の印刷が出来た。

ぎりぎりに精を出したる論文を眼下に見をりかさねしままに
幾たびか頁めくりてさながらに眼に浮かびくる生のかかはり
簡浄にここに記せる論文の結論のみとおのれ思ふな
過ぎ来つる一年半のわが生はこの一冊にほとほとかかはる
眼前に存すごと Marburg 先生に感謝ささげり動悸しながら
誰ひとり此処にゐざれば論文の頁を閉ぢて涙ぐみたり
Forschung の一片として世のつねの冷静になりし論文ならず

幾たびか寝られざりし夜のこともおもふ憤怒さへ
そこにこもりて

(「維也納歌稿 其三」大正 12 年『遠遊』)

この一連の歌は、淡々としているが、「生のかかはり」「わが生はこの一冊にほとほとかかはる」「閉ぢて涙ぐみたり」という表現からは、茂吉の論文完成に対する詠嘆と、愛惜の念が横溢しているようだ。

この論文は「麻痺性癡呆者の脳カルテ」という題目で、副題は「大脳皮質内における麻痺性病機の本能と分布との研究」である。ドイツ語文で、本文が 182 ページで、顕微鏡写真が 21 葉ある。岡田靖雄によれば、次のようなコメントがある。

マルブルクが提供した七つの脳につき、大脳皮質の構造のちがう五〇か所ほどをとりだして、組織変化がどのように分布しているか、しらべたものである。臨床所見との対比など不十分で、「本態」にせまったとはいえないが、ともかく根気のいる仕事であり、「四週間業績」ではなかった。かれがえた結果に、とくに独創的なものはなく、ほぼわかっていたことをきっちり確認したものといえるだろう。³⁰

いささか、拍子抜けするが、精神科医のコメントだけに正鵠を得ているのだろう。加藤淑子によれば、次のような論文の内容であったことを、もう少し詳しく論じている。

マルブルクより与えられた七例の麻痺性癡呆者の左大脳半球を、ブロードマンが大脳表面に作成した地図にしたがって切りとり、その各分野につき組織学的検索を行ったものである(略)人の大脳皮質を、細胞構築の差から片側五十二の区域に細分し、茂吉はそのうち四十四を研究対象とした。三分野を一連として検査した箇所もあるので、二百八十近い部分を切り取って顕微鏡標本作製したことになる。そして切りとった切片毎に大脳皮質の幅、軟脳膜、神経細胞、有髄神経繊維、神経膠細胞、血管周囲の間質細胞、桿状細胞について検証結果を記録し、麻痺性癡呆の病機の分布を明かにし、これにもとづいて病機の本態が論ぜられた。³¹

また、内村祐之は「科学者としての茂吉」で次のようにいう。

とにかくみじかい間によくもこれだけの研究を遂行し、かつ長文の立派なドイツ文を書いたものだと感服する。戦後の大学に教授でござるとすましている人々のうちに何人が、茂吉だけの努力をし、彼だけの研究、成果をあげただろうか。若い科学者たちは茂吉の前に恥じるがよい。(略)第一に茂吉の根気のよさと克明さに感服する。これは詩人や歌人の気まぐれ仕事などでは到底ない。第二には茂吉の自信の強さを感じ入る。当時この病気の研究には世界の有名無名の学者たちがきそって参加し、画期的の業績が噴出していた。その中に伍して茂吉が「本態についての研究」と副題を附したのは実に大膽なことであると思う。(略)第三の感想は(略)茂吉の顕微鏡使用の経験が相当にふかいものであるということだ。³²

かなり好意をもった茂吉への評価である。しかし、これは「アララギ斎藤茂吉追悼号」での文なので、その点を値引きして考えなければならないだろう。そこで、総合的に見るならば、茂吉の研究テーマは、精神医学上の突出した、画期的な成果は期待できないとしても、一心不乱に手間暇を惜しまずに成し遂げれば、必ず成果が出る課題であったと推察できよう。むしろ、特別な着想に基づくものではなく、ある程度は予測可能な研究テーマで確実性を狙ったとも考えられよう。誰もが必要性を認めながらも、手間のかかる研究だけに、着手することを躊躇していたのである。とは言っても、精魂を傾け、心血を注いで論文作成に没頭し、完成させた、茂吉のリビドーは大なるものであった事は間違いない。論文の印刷完成の間際の 4 月 11 日付け、島木赤彦宛の書簡では、次のようにいう。

僕の西洋での生活は、部屋にこもって文章を練るといふことは到底出来ない生活だ。僕が日本にゐて、実験医学の論文が出来なかったのは無理はないとおもふ。『歌』に携はってゐては、やはり出来ないものでありました。しかし『歌』に対するほど学問が好きなら、医学の論文など何でもありません。

さらに、4 月 28 日付け、平福百穂宛には「実際、僕は医学でも、人並にはやれます。歌ぐらゐ勉強す

れば、医学の論文などは、いくらも書けます。」といった。これらの書簡には、論文がいよいよ完成する（した）という安堵感なのだろうか、茂吉の偽らざる気持ちが込められている。愛して止まない歌に注いだ情熱に比較すれば、医学論文の方が容易であるという歌人としての自負でもある。

『遠遊』の後記で、「私は大正十一年一月維也納に著き、マールブルク教授の神経学研究所に入って翌年夏迄に及んだ。その間、麻痺性癡呆の脳病理に就て、及び他二題の論文を作った。また、アルレス講師の心理学教室に入り重量感覚知見補遺を公にし、また、ワーグネル教授の精神病学教室に出入して臨床上の知識を補った。」³³という。よって、「重量感覚知見補遺」以外の他二題の一つはシュピーゲルとの共著「植物神経中枢のホルモンによる昂奮性について」であり、もう一つは「脊髓水腫及び神経膠症を伴へる髄膜脳嚢脱出」である。ウィーンで、茂吉は四本の論文を作成した。「重量感覚知見補遺」は、11 ページの論文で、筋肉疲労と重量感覚との関係を調べたもので、日本で嘗て行ったエルゴグラフの研究に続く実験心理学である。岡田靖雄は「とくに新知見はない」³⁴と断言している。「植物神経中枢のホルモンによる昂奮性について」は、14 ページの論文で、こちらに対して岡田は「家兎の頭蓋に穴をあけて、ホルモンを脳室内に直接注入して、血圧にたいする影響をみたところ、諸種ホルモンの作用は血液を介したばあいと類似のものであった、という知見は、当時としてあたらしいものであった。」³⁵と評価している。残りの「脊髓水腫及び神経膠症を伴へる髄膜脳嚢脱出」は 16 ページの論文で、中枢神経系先天異常例の病理組織学的所見を論じている。この論文は、茂吉研究者にも長く見逃されていたが、加藤淑子が発見した。大作「麻痺性癡呆者の脳カルテ」を中心に、残りは「衛星の趣き」があるが、大きなテーマを追求しながら、小さなテーマも同時並行に研究を推進し、結果的には大小 4 つの論文を完成させたのであった。不器用な茂吉が、一途に、脳の切片を切り取り、顕微鏡で標本を観察する姿は、誰にも近寄り難い研究に没入した、茂吉の世界を創出したのであろう。だからこそ、短期間にその成果を得ることができたのである。茂吉にすれば、留学後に

研究者へ進もうという野心もなければ、その意志もなかったであろう。ただ、眼前にある研究に、我を忘れ、すべてのエネルギーを注いだのである。一点に懸ける、茂吉の集中力は、まさに一所懸命そのものである。

留学中は、研究だけに没頭したのではない。研究所での生活は、本人の自主性に任されるものであり、茂吉は、規則正しい生活を送り、徹夜続きで、研究所に寝泊まりしたことはない。夕方になれば研究所を辞し、日曜、祭日は休み、あるいは夏期休暇を利用して、業余には、寸暇を惜しみ、積極的に西洋文化を吸収したのであった。オーストリア国内旅行だけではなく、ドイツ、ハンガリー、イタリアへの小旅行も行った。随筆「蕨」の冒頭には、「維也納に留学してから半年が過ぎた。その間、教室では精根を尽して為事したのであったが、七月に入って、指導教授も山間の温泉地へ転地してしまふと云ふし、助手の一人二人は夏の休ぢゅう休まずに実験に来てゐても、取り立てて相談に乗ってもらふ必要もないので、これまで作った顕微鏡の標本やら、研究題目に関する先進の文献の書拔やらをその儘にしておいて、独逸の旅に出掛けることにした。」³⁶という。1922 (大正 11) 年 8 月 5 日～7 日にかけて、ミュンヘンで諸教授に会っている。

諸教授を訪ひてところは和ぎゐたり、
Spielmeyer, Rudin, Isserlin

(「独逸旅行」大正 11 年『遠遊』)

ヴァルテル・シュピールマイエル (1879～1935) は、神経病理学の碩学である。岡田靖雄によれば、「1912 年クレペリンにまねかれてミュンヘンで精神神経科の神経病理研究室を主宰、1917 年新設のドイツ精神医学研究所の神経病理部長。1928 年カイゼル・ヴィルヘルム研究所開設とともに神経病理研究所所長として、みづからの研究をすすめるとともに、世界中からあつまった神経病理学研究者を教育した。」³⁷とある。前述の内村祐之もこの研究所に留学していた。

エルンスト・リューディン (1874～1952) とマクス・イセルリン (1879～1941) は、共にクレペリンの教室にいた研究者である。

また、フランクフルトでは、ヤーネルに会った。

茂吉は「巖」の中で「大学の精神病学教室を訪うた。ここでは折よく、F.Jahnel という少壮教授に会った。この人は、野口英世博士の後に、また特別の方法で麻痺狂脳髓の中のスペロヘータを研究した人である。教授は幾枚も標本をのぞかせ、しまいに三枚の標本を僕にくれた。教授の靴紐は切れたのをつないだ結目がいかにも目立った。それを大発見でもしたような気持になって教室を辞した。」という。その他、詳細は省くが、精力的に研究所や精神病院を訪ね、教授に会った。そして、「脳カルテ」が脱稿したことで、ウィーンでの「為事」を終え、ミュンヘンへと転学を決意したのであった。

真夏日の黒々とせる森こめて Wien はしりへに
遠ざかる見ゆ

(「維也納歌稿 其四」大正 12 年『遠遊』)

5. まとめ

茂吉は、呉秀三らの先人の留学を「呉秀三先生を憶ふ」で、次のようにいう。

當時の本邦留学生は帰朝に際しては皆銘々の『背景』を将来した。即ち『本尊』を背負ひ、その光輝と共に帰朝したものである。恰もかの最澄、空海の如き高僧の求法攷学に類似し、彼等がその本尊と経疏とを将来したのと類似して居るのである。今の留学・洋行の概念はもはや平凡化してしまったけれども、當時の留学生の意気込が既に今とは違ってゐたのである。³⁸

要するに、大正時代の留学ともなると、最澄、空海、あるいは道元のような、本尊や經典を将来するのではなく、せいぜい經典の「義疏」となっているのである。世俗的に言えば、研究のためではなく、箔をつけるためにだけ、留学した者もいたのである。茂吉も箔をつける為の留学ではあった事是否定できないが、「為事」を為し遂げたのであった。

さて、ウィーン滞在中の歌は、『遠遊』に纏めてられているが、茂吉が言うように、簡単な日録の余白に歌を書きつけたものであり、「全く歌日記程度のもの」であった。ところが、「為事」のために、歌人を封印していた茂吉であるが、次第に随筆家としての茂吉を結果的に、際ださせることとなった。とくに、「ドナウ源流行」「接吻」「妻」等の欧州随筆は、ヨ

ーロッパ紀行の白眉とも言われるようになった。さて、中村憲吉は、『宮本武蔵』という書物を、茂吉の留学に向けての餞別とした。そこで、茂吉は「巖流島」で次のように言う。

壱太利の維也納に丸一年いるうち、友から贈られた『宮本武蔵』を繙き、武蔵の兵法の奥義などを読んで、「能く習ひ得て鍛錬有べき義也」などという語句にしばしば逢著しても、武蔵がこの鍛錬で巖流の頭蓋を打くだいたのだと思ふと、私の心はひとりでに武蔵の兵法を憎悪した。特に教室における私の為事ははかどらず、論文がなかなか出来ないときに、この書物などを読むと、益々私の武蔵のペテン術鍛錬法を憎悪したのであった。時には書物を牀上にほうり付けたことなどもある。それほど私の心はいらいらしていた。

このように茂吉は、研究に行き詰まり、解消すきもない欲求不満を、書物にぶつけたのであった。

かの有名な「接吻」という随筆がある。茂吉は、ウィーンの街角の歩道で、夏の夕暮に、貧しい身なりの男女が長い接吻をした光景を記す。二人は、同じ姿勢で抱擁し続けている。その後「僕は稍不安になって来たけれども、これは気を落付けなければならぬと思って、少し後戻りをして、香柏の木かげに身をよせて立ってその接吻を見てゐた。その接吻は、実にいつまでもつづいた。一時間あまり経ったころ、僕はふと木かげから身を離して、いそぎ足で其処を去った。」³⁹とある。翌年の正月にも、ウィーン校外の山上で、再び一時間もの接吻に出会った。この夏の接吻について、茂吉は「どうも長かったなあ。実にながいなあ。」と嘆息する。それを見ていた茂吉に、読者は嘆息する。異国で、男女の接吻を何と一時間以上も、「気を落付けて」凝視し、観察しているのである。二人も二人ながら、茂吉も茂吉である。この場面を引いて見れば、接吻する二人に、それを眺める男という構図である。奇異であるし、何とも言えぬ滑稽さを感じ取ってしまう程だ。これを読み、茂吉の執拗さ、粘着性、あるいは執着性に驚くというよりも、呆れると評した方が、適切ではないだろうか。だからこそ、茂吉の常軌を逸する集中力によって、前途多難であった脳髓病理の「為事」を、短期

間に仕上げる事ができたのではないだろうか。

茂吉は、留学前に帝室博物館長となっていた森鷗外を訪問し、激励された。茂吉は、終生にわたり鷗外を私淑し、師事していた。それは、医学者であり、文学者であった鷗外への敬愛と憧憬であった。大正11年8月28日に、ベルリンの日本大使館で鷗外の訃報を知る。茂吉にとって、大きな精神的な支柱を喪失することとなった。

さて、茂吉を語るに、茂吉の土着性とヨーロッパ的世界について論ぜられる事がある。芥川龍之介は『僻見』の中で「近代日本の文芸は横に西洋を模倣しながら、堅には日本の土に根ざした独自性の表現に志してゐる。茂吉はこの堅横の両面を最高度に具えた歌人である」⁴⁰と評している。これを医学者の茂吉で考えるならば、ウィーンでは、研究に没頭し、臨床の体験をする機会は、ほとんどなかった。しかし、西洋との出会いにより「深処の生」を見つめ、オーベルシュタイネルから、呉秀三へと伝授された「医の心」を体得したのであった。

¹ 『斎藤茂吉全集』第33巻、岩波書店、1973年、410ページ。

² 第33巻、404ページ。

³ 藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎、1987年、182ページ。

⁴ 第5巻、109～110ページ。

⁵ 同巻、109ページ。

⁶ 第7巻、288～289ページ。

⁷ 同巻、305～306ページ。

⁸ 岡田靖雄『精神病医 斎藤茂吉の生涯』思文閣出版、2000年、193ページ。

⁹ 加藤淑子『茂吉形影』幻戯書房、2007年、48ページ。

¹⁰ 小俣和一郎『近代精神医学の成立ー「鎖解放」からナチズムへ』人文書院、2002年、130ページ。

¹¹ 加藤淑子『斎藤茂吉と医学』みすず書房、1978年、45ページ。

¹² 岡田靖雄、前掲書、195ページ。

¹³ 『アララギ』斎藤茂吉追悼号、アララギ発行所、1953年、37ページ。

¹⁴ 『アララギ』前掲書、38ページ。

¹⁵ 『アララギ』前掲書、38ページ。

¹⁶ 第33巻、478ページ。

¹⁷ 同巻、484ページ。

¹⁸ 柴生田稔『続斎藤茂吉伝』新潮社、1981年、97ページ。

¹⁹ 『呉秀三著作集』第1巻（医史学篇）、思文閣出版、1982年、218ページ。

²⁰ 第5巻、567ページ。

²¹ 同巻、597～598ページ。

²² 同巻、599ページ。

²³ 同巻、577ページ。

²⁴ 同巻、577～579ページ。

²⁵ 同巻、582～583ページ。

²⁶ 『アララギ』前掲書、38～39ページ。

²⁷ 『呉秀三著作集』第1巻、214～217ページ。

²⁸ 同上、217ページ。

²⁹ 第5巻、595ページ。

³⁰ 岡田靖雄、前掲書、209ページ。

³¹ 加藤淑子『斎藤茂吉と医学』60ページ。

³² 『アララギ』前掲書、43～44ページ。

³³ 第1巻、559ページ。

³⁴ 岡田靖雄、前掲書、211ページ。

³⁵ 同書、212ページ。

³⁶ 第5巻、735ページ。

³⁷ 岡田靖雄、前掲書、202ページ。

³⁸ 第6巻、139ページ。

³⁹ 第5巻、133ページ。

⁴⁰ 『芥川龍之介全集』第6巻、岩波書店、1978年、355ページ。

(Received: May 31, 2009)

(Issued in internet Edition: July 1, 2009)